

1 文芸から教師論へ

さまざまな「教師論」がありうるなかで、本書がとる立場は、やや特異なものであるかもしれない。本書は、主として文芸作品に描かれた教師を取り上げ、ある状況の中で彼女または彼の身の処し方に焦点を当てることよって、そこから「教師論」として学びうるものを引き出すことを意図している。

ある時代によく読まれる文芸作品には、時代を反映する側面と時代を先取りする側面とがある。文芸作品は、その時代の経験や欲求や感覚や観念を反映したり、それら先取りして描いたりする。この点からすれば、文芸作品は、時代の状況とその変化の兆候について、重要な手がかりを与えてくれる。教師が登場する文芸作品の場合も、教師という存在の特殊性を考慮する必要はあるが、同様のことがいえるであろう。

時代を反映するにせよ、時代を先取りするにせよ、文芸作品は、教師という人間をその生活全体において丸ごととらえることよって、教師という存在のありようについて、教師の職業上の役割にとどまらず、もつと深く描き出すことができる。一般に、教師論は、教師という職業がもつ役割に限定された教職論になったり、逆に教師という人間を理念的に論じたものになったりしがちである。これに対して文芸作品は、こうした二つの論じ方を超えた視点を提示してくれるように思われる。

とくに、教師役割を遂行しようとする自己と、その役割をはみ出したりそれに反逆したりする自己との間の葛藤は、それぞれの時代のそれぞれの状況で、それぞれの教師の身の処し方の中にあられるにちがいない。文芸作品は、このような自己の諸層の間の葛藤、というよりもむしろ、こうした葛藤を通じて経験される孤独を描いていると考えられる。この種の葛藤は、他者が代わりに引き受けるわけにはいかなないので、孤独として経験されることが多いのである。たとえば、『二十四の瞳』の大

石先生は、軍国調が強まるなかで要求される教師役割と自分自身の生活つづり方に対する関心との間に生まれる葛藤に悩む（もつとも、彼女はそういう学校に嫌気がさして、教師をやめてしまうという身の引き方をするのだが）。

教師がどんな状況のものでどのような身の処し方をしていくかについて、教師が登場する文芸作品は、それがフィクションによる実験的な試みであればあるほど、「教師論」として学びうる事柄をいろいろと教えてくれる。『兎の眼』の小谷先生は、大学出たての新採用教員であり、しかも結婚した

ばかりで、いきなり小学一年生の学級担任になる。こんなことは、実際にはほとんどありえないが、こういうフィクション的な条件設定のもとで、いきなり鉄三というむずかしい子どもをぶつけることよって、彼女がどういう身の処し方をするようになっていくか、という実験が試みられているともいえる。現実の教育の世界では、実験はできないが、文芸作品の中なら、どんな実験でもできる。そういう実験によつて、かえつてリアリティをえぐり出すことができるのが、文芸作品の創り出す世界ではなかるうか。

『二十四の瞳』の時代

1 『二十四の瞳』を読む

一九五四（昭和二九）年頃だったと思うが、当時高校生だった私は、大ヒットした映画『二十四の瞳』（木下恵介監督）を映画館で見た記憶がある。スクリーンに映る大石先生はよく泣いたが、映画館の中の観客も泣いていた。実際、この映画については、そのように思い出す人が多い。

このたび久しぶりに読み直した『二十四の瞳』は、戦争への静かな憤りの中にもユーモアに満ちた語り口に、味わい深いものがあると感じられた。よく読んでみると、物語の舞台となる昭和の初めから敗戦後にかけての瀬戸内海べりの一寒村の人々の「貧しさ」が、細かく描かれている。

一九二八（昭和三）年に女学校の師範科を出たばかりの大石先生が赴任した岬の突端にある村の分教場の一年生十二人の子どもの家の職業としては、とうふ屋、米屋、網屋、料理屋、チリリン屋、大工、よろず屋、そして没落した旧家などが出てくる。

「それぞれの家業はとうふ屋とよばれ、米屋とよばれ、網屋とよばれていても、そのどの家もめいめいの商売だけではくらしがたらず、百姓もしていれば、かたてまには漁師もやっている、（略）だれもかれも寸暇をおしんではたらかねばくらしのたたぬ村、だが、だれもかれもはたらくことをいとわぬ人々である（略）」（26頁）

2 労働力としての子ども

小さな子どもたちも、学校から帰るとすぐに子守になり、麦つきを手伝わされ、網引きにいく。村の共同体の中で生活する子どもたちは、学校に行くと「生徒」になるが、下校するとその労働力に応じて「小さなおとな」になるのである。学校の「生徒」は、天皇に忠良な臣民となること、あるいは産業社会での勤勉な働き手となることを求められるが、猫の手も借りたい村の共同体の中の個々の家では、子どもは何よりも労働力であった。昔から十歳になるまでは遊んでもよいというのが掟だったが、手のかかる弟や妹がいると、女の子は子守役を引き受けなければならなかった。

3 大石先生という人

分教場では、二人の先生（三、四年担任の男先生と一、二年と音楽・裁縫担任のおなご先生）が教えることになっていたが、宿直室に住みついている男先生も、貧しかった。

「いつもげたばきで、一まいかんばんの洋服はかたのところをやけて、ようかん色にかわっていた。子どももなく年とったおくとふたりで、貯金だけをたのしみに、けんやくにくらしているような人だから、人のいやがるこのふべんな岬の村へきたのも、つきあいがなくてよいと、じぶんからの希望であったというかわりだねだった」（18頁）

苦勞を重ねて検定試験で教員の資格を取ったが、校長にはなれない、こんな男先生の最後の勤め先

が分教場だった。これに対しておなご先生の方は、女学校出の新米の先生(準教員)が着物姿で遠い道を歩いて通い、一年かせいぜい二年すると転任するのが普通だった。それは、昔からあるままりきった規則のようなものだった。

そんな分教場に、洋服を着て自転車に乗って颯爽とやってきたのが、女学校の師範科を出たばかりの正教員の大石先生だった。この「ハイカラさん」は、たちまち村中の評判になる。どんな小さな出来事でも、たちまち知れわたる小さな村である。口さがない村人のうわさには尾ひれもついてくる。しかも、彼女のハイカラさは、村の共同体にそのまま受け入れられるものではなかった。村の人たちからすれば、教師は明らかにヨソモノである。男先生のように宿直室に住み込んで村の人と同じものを食べ同じ言葉を使えば、村の人たちもうちとけて魚や野菜を持ってきてくれるようになる。だが、村ではまだ乗る者もない自転車に乗って洋服でやってきたのだから、村の人たちは彼女に気を許すことができなかったのである。もちろん、大石先生(大石久子)の方にも事情はあった。船乗りの父親が早く死んで母子家庭で育った彼女は、下宿することも勧められるが、師範科での二年間、一人きりにした母親と一緒に暮らしたくて、片道八キロの道を通う決心をする。

「自転車は久子としたしかった自転車屋のむすめの手づるで、五か月月賦で手に入れたのだ。着物はないので、母親のセルの着物を黒くそめ、へたでもじぶんでぬった。それともしらぬ人々は、おてんばで自転車にのり、ハイカラぶって洋服をきていると思っただけかもしれぬ」(20頁)

母一人子一人の苦労を表に出さず、持ち前の明るさと茶目っ気で振る舞おうとする大石先生に対して、村の人たちの批判の目は厳しかった。しかし、先生が落とし穴に落ちて怪我をし、いつまでたっても学校に姿を見せない先生の家まで一年生の子どもたちが八キロの道を歩いて会いに行くという事件をきっかけに、大石先生は村の共同体に受け入れられる。「ひちむつかしい」村ではあるが、「そんな村は、気がわかかったとなると、むしろくちやに人がよい」(90頁)のである。だが、その先生も、本村の小学校に転任になる。

その後、五年生になった十二人の子どもたちが、片道五キロの本村の小学校に歩いて通ってくるようになる。しかし、軍国調への時代の動きは激しく、否応なく戦争へと人々をつき動かしていく大きな力の中で、男の子の多くが軍人を志望するようになる。そして近くの町の小学校の生活つづり方に熱心な教師が警察に捕まるという事件のあと、大石先生は、授業中生徒に「赤って、なんのことか知ってる人？」と聞いて校長に「気をつけんと、こまりまつそ。うかつにものがいえんときじゃから」(124頁)と注意されたり、生徒と「先生、軍人すかんの?」「うん、漁師や米屋のほうがいい」「へえん、どうして?」「死ぬの、おしいもん」「よわむしじゃなあ」「そう、よわむし」といった会話をしたりして「大石先生、赤じゃと評判になつてますよ。気をつけんと」と注意されたりして、ついに母親に「わたし、つくづく先生いやんなつた」(146-147頁)と訴えるのである。「赤」が何であるかも実はよくわからず、国家権力に刃向かったのでもなく、世間に反抗したのでもないが、学校で「なんとなくめだち、問題にもなる」大石先生は、船乗りの婿との間に子どももできるということもあって、十二人の子どもたちが六年生を終えた次の年度の始まりとともに送り出される人となる。退職した翌日は、「だいたいなものをぬきとられたようなきしき」(152頁)を感じるのだった。

それにしても、「明るさ」と「茶目っ気」は、「子どもがよくなく」(149頁)ことと並んで、大石先生の何よりの特徴だった。彼女はよく泣くが、同時に、「思わずふきだし」たり、「きやつきやつとわらつ」たり、「はらをかかえて、思うぞんぶん笑つた」り、よく笑う人であることは、小説を読めばよくわかる。

だが、「二十四の瞳」の作者は、敗戦後の時点に立って、戦争を反省する視点からこの小説を書いたものであり、そこには、「このような教師がいてくれたなら」という作者の願いや祈りがこめられていたのではなからうか。「(戦争中は) いっさいの人間らしさを犠牲にして人々は生き、そして死んでいった」(178頁)と記している。また作者が大石先生をいわゆる「師範タイプ」(上からいわれたことは忠実にやり、そこからはみ出すことはしない、上の人へつらい、下の者には権威的、表裏があつて陰湿、優越感と劣等感の共存など) (324頁)として描いていないことは、彼女の茶目っ気のある小さな抵抗を見ればわかるはずである。

しかし、「二十四の瞳」については、日本人の戦争責任に対する視点がないという批判もある。同

二十四の瞳 (映画)

あらすじ

1928年(昭和3年)、大石先生は新任の女教師として小豆島の嶺の分教場に赴任する。一年生12人の子供たちの受け持ちとなり、田舎の古い慣習に苦勞しながらも、良い先生になろうとする大石先生。

ある日、大石先生は子供のいたずらによる落とし穴に落ちてアキレス腱を断裂、長期間学校を休んでしまいが、先生に会いたい一心の子供たちは遠い道のりを泣きながら見舞いに来てくれる。

しばらくして、大石先生は本校に転勤する。その頃から、軍国主義の色濃くなり、不況も厳しくなって、登校を続けられない子供も出てくる。やがて、結婚した先生は軍国教育はいやだと退職してしまう。

戦争が始まり、男の子の半数は戦死し、大石先生の夫も戦死してしまう。また、母親と末娘も相次いで世を去る。

長かった苦しい戦争も終わり、大石先生はまた分教場に戻り教鞭を取ることになる。教え子の中にはかつての教え子の子供もいた。その名前を読み上げるだけで泣いてしまう先生に、子供たちは「泣きミノ先生」とあだ名をつけた。

そんな時、かつての教え子たちの同窓会が開かれる。その席で、戦争で失明した磯吉は一年生のときの記念写真を指差しながら(オリジナル版では指差す位置がずれ、涙を誘う)全員の位置を示す。真新しい自転車を贈られ、大石先生は胸が一杯になり、涙が溢れてきた。その自転車で大石先生は分教場に向かう。